

日本版カウンセリング自己効力感尺度作成の試み^{1), 2)}

上野まどか*・金沢吉展**

The Development of Japanese Clinical Psychologist's Counseling Self-Efficacy Scale

Madoka UENO* and Yoshinobu KANAZAWA**

The purpose of this study was to develop Japanese Clinical Psychologist's Counseling Self-Efficacy Scale through an analysis of its reliability and validity on a Japanese sample. The authors translated the Counseling Self-Estimate Inventory (Larson et al., 1992), which measured counseling self-efficacy, into Japanese and developed a revised version based on Japanese culture and clinical practice. The scale was distributed to a random sample of 750 members of the Association of Japanese Clinical Psychology and 16 graduate students in clinical psychology. Two hundred ninety-seven (43.87%) usable responses were obtained. The results of factor analysis indicated that Japanese Clinical Psychologist's Counseling Self-Efficacy Scale consisted of 5 dimensions: "Confidence in counseling skills", "Understanding of clients and setting goals", "Working with unmotivated clients", "Consideration of clients' situations and conditions" and "Controlling counselors' judgment". Factor-derived scale scores produced adequate internal consistency ($\alpha = .881 \sim .703$) and showed positive correlations with general self-efficacy scores, thus demonstrating convergent validity. The authors discussed differences between the Japanese and the original scales. Further examining relationships between counseling self-efficacy and counselor performance, skills, differing levels of clinical experience and training as counselor will be useful for the training of clinical psychologists and clinical practice.

key words: Counseling Self-Efficacy, scale development, reliability, validity, Japanese clinical psychologist

問題と目的

近年、カウンセリングや心理療法の効果研究の領域では心理臨床実践に影響があると思われる様々な変数が検討され、カウンセラーが治療効果に関わる重要な変数となっている (Beutler, Machado &

Neufeldt, 1994; Lambert & Bergin, 1994; Lambert & Cattani-Thompson, 1996; Nelson & Neufeldt, 1996)。また、治療効果に関係するのは、臨床家の持っている共感性、温かさ、肯定的関心 (Lambert & Barley, 2001; Lambert et al., 1996)、精神的健康 (Barnett, Baker, Elman & Schoener, 2007;

* 明治学院大学大学院心理学研究科
Graduate School of Psychology, Meiji Gakuin University,
1-2-37 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8636, Japan
e-mail address: 08psd002@mail1.meijigakuin.ac.jp

** 明治学院大学心理学部
Department of Psychology, Meiji Gakuin University
1-2-37 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8636, Japan

¹⁾ ご多忙の中、調査にご協力頂きました日本心理臨床学会会員の皆様と大学院生の皆様に厚くお礼申し上げます。

²⁾ 本尺度作成にあたっては、原著者の承諾を得ています。

Guy, Poelstra & Stark, 1989; 金沢・岩壁, 2006 a), 対人関係スキル (Lambert et al., 2001) など、特定の理論を問わず共通した特徴があることがわかっている。中でも、Bandura (1977, 1982) において提唱された自己効力感¹は、カウンセラーの臨床実践における態度や行動、反応などと関連のある重要な概念として取り上げられている。

自己効力感²は、カウンセラーの臨床実践における思考パターンや行動の選択や継続、情緒的喚起、努力や忍耐などの行動を決める重要な決定因となりうる³ことが指摘されており、例えば、カウンセリングの自己効力感が高ければ高いほどカウンセラーとしてとるべき行動を行える可能性が高まる⁴ことが示されている (Larson, Suzuki, Gillespie, Potenza, Bechtel & Toulouse, 1992)。Larson & Daniels (1998) は、臨床心理学的援助において最も基本的で重要視されているカウンセリングの自己効力感を「近い将来、クライアントを効果的にカウンセリングすることができるという自分の能力についての判断や信念」と定義し、効果的なカウンセリング行動を生み出す信念であると重視している。

カウンセリング実践における自己効力感と他のカウンセラー側の変数との関連を検討した調査では、カウンセラーの自己概念 (Larson et al., 1992)、結果予期 (Larson et al., 1992; Sipps, Sugden, & Faiver, 1988)、効果的な問題解決行動 (Larson, 1992)、カウンセリングでの肯定的感情 (Lent, Hill, & Hoffman, 2003)、満足感 (Larson et al., 1992) との関係がみられることが明らかになっている。また、カウンセラーの不安 (Larson et al., 1992) やカウンセリングで感じる不快感情 (Lent, Hill, & Hoffman, 2003) とは負の相関があることが分かっている。このように、自己効力感⁵は治療効果に関わるカウンセラー側の態度や行動、情緒、思考と関連の深い重要な変数であることが示唆される。

また、カウンセリングに関する自己効力感⁶は、効果的なカウンセリング行動を生み出す信念として捉えられているだけでなく、カウンセラーの教育、及び職業的発達の一指標としても重要視されている。先行研究では、カウンセリングを行う自己効力感⁷がクライアントとのセッション回数 (Lent, Hoffman, Hill, Mount, Singley, & Treistman, 2006)、臨床経験年数や訓練 (Larson et al., 1992; Lent et al.,

2006)、カウンセラーの発達 (Leach, Stoltenberg, McNeill, & Eichenfield, 1997) との相関が示されている。スーパーヴィジョン⁸を受けているカウンセラーは、受けていないカウンセラーに比べ自己効力感が有意に高かったことが示されている (Cashwell & Dooley, 2001) ように、環境要因によっても自己効力感のレベルが異なることがわかる。Johnson, Baker, Kopala, Kiselica, & Thompson (1989) も「自己効力感の高いレベルは良いカウンセリングスキルの上達と同じくらい重要であるだろう」と述べ、訓練過程にあるカウンセラーの自己効力感が向上することの重要性を示している。葛西 (2005) は、カウンセラーを目指す大学院生の成長過程を客観的に測定する手段としてカウンセリング自己効力感⁹の測定に着目し、効果的な訓練方法を模索するのに役立つと示唆している。

以上のように、カウンセリング自己効力感¹⁰は、カウンセリング実践と深い関係があるのみならず、カウンセラーの発達や教育を考える上でも有用であると思われる。

臨床実践における自己効力感¹¹の測度として、欧米では、心理臨床実践の基本的・中心的ともいえるカウンセリングの自己効力感を調べるための尺度 (Larson et al., 1992; Lent et al., 2003 など) が開発されているほか、スクールカウンセリングやキャリアカウンセリングなどの特定の領域やスキルにおける自己効力感を測定する尺度 (O'Brien, Heppner, Flores, & Bikos, 1997; Sutton & Fall, 1995 など) がある。

本邦では、葛西 (2005) がカウンセラーを目指す大学院生のカウンセリング自己効力感を測定する為に Counselor Activity Self-Efficacy Scales (Lent et al., 2003) の日本語版を作成し、多くの示唆を得ている。しかし、原著の尺度は、カウンセラーが個人的な洞察を得た過去経験を語ったり、自分の成育歴や感情をクライアントに明らかにすることをどれ程効果的にできる自信があるかを問う、自己開示に関する項目が見られる。カウンセラーが自分自身の個人情報について話すことは「クライアントが知る必要のない情報であることから、境界侵害と見なされる」と金沢 (2006) が述べているように、個人情報をクライアントに話す行為自体が職業倫理上好ましくない可能性がある。

その為、本研究では欧米で最も多く用いられている、Larson et al. (1992) が開発した Counseling Self-Estimate Inventory (以下、COSE と記す) に着目した。Larson et al. (1992) によれば、この尺度は、カウンセラーの自己効力感を測定する為に作成され、特定の療法に偏らず認知行動療法やシステムズアプローチ、マイクロカウンセリングなどのサイコセラピストになるための訓練過程で用いるテキストから項目を集めた尺度である。信頼性や妥当性も確認されており、カウンセリングの自己効力感を測定するために最も一般的に使用されているものである (Barnes, 2004)。

Cashwell & Dooley (2001) は、スーパーヴィジョンを受けているカウンセラーは受けていないカウンセラーに比べて、カウンセリング自己効力感が高いという仮説を立てたところ、スーパーヴィジョンを受けているカウンセラーは受けていないカウンセラーと比較して有意に COSE の得点が高く (自己効力感が高い)、自己効力感が高ければ高いほどパフォーマンスのレベルも高くなると考察している。

Leach et al. (1997) は、COSE を用い、Stoltenberg & Delworth (1987) が示したカウンセラーの職業的発達段階のレベル 1 とレベル 2 の段階を吟味した。より高い段階 (レベル 2) に相当する訓練生は、低い段階 (レベル 1) の訓練生に比べて、COSE の全ての因子において得点が高く、性的虐待を受けたクライアントと関わった経験が多い訓練生は、経験の少ない訓練生よりも COSE の「困難なクライアントの行動への対応」因子において高い自己効力感を有していることを示した。

Daniels & Larson (2001) は、訓練生が行う模擬カウンセリングに対する肯定的もしくは否定的フィードバックが、訓練生の自己効力感や不安に及ぼす影響について調べた。結果、肯定的なフィードバックを受けた訓練生は COSE 得点が高くなり、STAI-S 得点が減少することが示され、介入によっても変化がみられることを明らかにした。

以上のように、欧米で COSE はカウンセリングを行う際の自己効力感の測定として最もよく用いられており倫理的側面を勘案しても使用しやすい項目内容である。しかし、本邦ではまだ研究に用いられていない。臨床心理学的実践の質とカウンセラーの教育や訓練の充実を目指す上でも有用な尺度であるた

め、本研究では COSE を邦訳し、日本版カウンセリング自己効力感尺度を作成する。そして信頼性と妥当性について検証することを目的とする。信頼性は、クロンバックの α 係数を算出することで検証し、妥当性は一般性自己効力感との相関係数により確認する。カウンセリングを行う自己効力感を測定できることで、訓練生の発達やスキルの上達を捉えるための一指標となり、スーパーヴィジョンや研修プログラムといった、教育内容やシステムの評価や改善に役立つと思われる。延いては、葛西 (2005) も指摘するように、カウンセラーを目指す大学院生の成長を客観的に測定することができれば効果的な訓練方法を吟味することも可能になり、訓練方法の有効性を社会に示すためのアカウンタビリティとして役立つであろう。また、今後の研究において、カウンセリング自己効力感が、実際の臨床実践やクライアントにどのような影響を及ぼしているかについて検証することによって治療効果に役立つ示唆を得る一助となりうる。

方 法

調査内容 質問紙による調査を実施した。用いた尺度は以下の通りである。尚、調査時には②も併せて配布したが、本論文ではカウンセリング自己効力感尺度の作成について論じるため①と③と④のみ検討する。

① 日本版カウンセリング自己効力感尺度

カウンセリング自己効力感を測定した Larson et al. (1992) の COSE37 項目を臨床心理士資格を有する大学教員 1 名と筆者らで原文に忠実に和訳したところ、日本の臨床家にとって違和感を抱かせる項目が多かったため、原文に基づきながらも、日本の心理臨床で用いる表現に改変した。その他にも、和訳・改変の際に留意したことは、原著では「I am confident...」といった明確な表現が多用されているが、日本人の謙遜の気持ちや「あいまい文化 (鎌原・宮下・大野・中澤, 2007)」を考慮し控え目な表現にする等、日本文化に合うような表現に改変したことと、全体的に項目の文章が長かったためより理解しやすいように文章を短縮したことである。

原著の尺度は 5 因子で構成されている。第 1 因子は、問題の明確化や定義などカウンセラーの基礎的なスキルを反映した「マイクロスキル」因子である。

第2因子は、クライアントとの関係ややり取りの中で起こるカウンセラーの反応を統合することが出来るかどうかに関する「プロセス」因子である。第3因子は、自殺、虐待、アルコールの問題があったり、動機づけが低い、決断力のない、話をしないといったクライアントに焦点が当たった「困難なクライアントの行動への対応」因子である。第4因子は文化や民族や社会的階級の異なるクライアントのカウンセリングに関する「文化的能力」因子である。最後に第5因子はカウンセラーの先入観や価値観に関する「価値観の気づき」因子である。 α 係数は.88～.62と概ね十分な信頼性が示されている。肯定的自尊心や問題解決行動との相関、不安との負の相関が見られ妥当性が確認されている。

教示は「現在、あなたは臨床実践を行う時にどのような気持ちを感じていますか？」であり、回答はLarson et al. (1992) にならい「全く当てはまらない」(1点)「当てはまらない」(2点)「やや当てはまらない」(3点)「やや当てはまる」(4点)「当てはまる」(5点)「とても当てはまる」(6点)の6件法で求めた。暫定版を作成したのち、上記3名と臨床心理士1名、および臨床心理士指定大学院在学中の大学院生5名で内容的妥当性ならびに表面的妥当性を検討の上作成した。

② 心理臨床家志望動機尺度

先行研究を参考に心理臨床家志望動機(内的要因)尺度39項目と心理臨床家志望動機(過去経験)尺度28項目の2つから構成される尺度を作成した。回答は4件法で求めた。尚、②は本論文の分析対象でないため論じない。

③ 一般性自己効力感尺度(坂野・東條, 1986)

日本版カウンセリング自己効力感尺度の妥当性検討のために使用した。一般性自己効力感は「特定の行動の選択場面ばかりではなく、般化した行動レベルでの変容(坂野・東條, 1986)」も包含した個人の一般的な自己効力感であり、一般性自己効力感も高いと、カウンセリングを行う際の自己効力感も高く、正の相関がみられると推測される。全16項目であり、回答は「いいえ」(0点)「はい」(1点)の2件法で求めた。

④ デモグラフィック変数

金沢・岩壁(2006b)を参考に、性別・年齢・臨床活動経験年数・心理面接経験年数・スーパーヴィ

ジョンを受けた経験年数・主な職域・資格(複数回答可)・主な理論的志向性・最終学歴を尋ねた。臨床心理士1名、臨床心理士資格を有する心理学部の教員1名、および臨床心理士指定大学院在学中の大学院生3名と共に検討した。

調査協力者 「日本心理臨床学会会員名簿2006年度版」の中から無作為で750名に質問紙を郵送した。質問紙の他に依頼文、謝礼の粗品、返信用封筒を同封した。転居不明などで89通が返送された。加えて、今後の研究で臨床心理士の教育や訓練に使用する可能性もあることから臨床心理士指定大学院1校から大学院生16名に縁故法で配布し、いずれも郵送にて回収した。301通が回収され、うち有効回答は297通だった(有効回答率43.87%)。内訳は女性191・男性105・不明1名、平均年齢45.42歳($SD=13.08$, 範囲24～81), 平均心理臨床経験15.66年($SD=11.77$, 範囲1～55), 平均心理面接経験13.99年($SD=11.31$, 範囲0～55), スーパーヴィジョンを受けた平均経験5.92年($SD=6.45$, 範囲0～40)だった。主な職域は順に、教育108名、医療・保健66名、福祉40名、大学・研究所34名、労働・産業10名、司法・矯正・警察10名、私設心理相談6名、その他18名、不明5名だった。主な理論的志向性は順に、折衷主義/統合主義97名、精神分析理論62名、特に志向する理論はない者42名、人間性心理学29名、分析理論23名、認知行動理論16名、システム理論13名、行動理論2名、アドラー理論1名、認知理論1名、その他7名、不明4名だった。有する資格は順に臨床心理士247名、教員51名、その他17名、等だった。最終学歴は高校1名、学士89名、修士186名、博士21名だった。

調査時期 配布時期は2009年1月下旬～3月上旬、回収時期は2009年2月中旬～3月下旬だった。

分析 因子分析(重み付けのない最小二乗法・プロマックス回転)を行った。先行研究と同様の5因子解を採択した。負荷量.400以下の13項目を削除し残る24項目で再度分析を行った。信頼性の検討のためにクロンバックの α 係数を算出し、妥当性の検討は一般性自己効力感尺度とのピアソンの相関係数を算出した。

Table 1 日本版カウンセリング自己効力感尺度因子分析結果（重み付けのない最小二乗法 プロマックス回転）

質問項目	1	2	3	4	5	共通性
第1因子〈カウンセリング面接技能への自信 6項目 $\alpha=.881$ $M=3.71$ $SD=0.71$〉						
5 私は、解釈や直面化を簡潔に的を射て行うことができると思う。	.924	-.069	.117	-.123	-.092	.625
12 クライアントが納得して受け入れるような解釈や直面化を行えると思う。	.808	-.075	-.004	.129	-.030	.680
22 私は、クライアントに対して適切に直面化したり、さらに洞察や変化を求めたりすることができると思う。	.723	.195	-.037	-.160	.071	.612
17 私の行う解釈や直面化の表現は、クライアントに理解しやすいと思う。	.665	-.003	-.084	.186	.099	.674
1 私は、感情の反映や積極的傾聴、明確化、質問のような応答を簡潔に的を射て行えると思う。	.638	.164	.000	.049	-.025	.662
18 私は治療関係の中で、一つ一つの反応や行動について考えなくても自然に自分自身を表現することができると思う。	.488	.076	.045	.042	-.033	.408
第2因子〈クライアント理解と目標設定 7項目 $\alpha=.875$ $M=4.16$ $SD=0.66$〉						
33 私は、クライアントが具体的な目標を立てたり選択していくためにどのようにしたらよいかわからない。*	.047	.865	-.060	-.070	.005	.661
32 私は、クライアントの問題を理論的に理解したり、見立てることができないと思う。*	.045	.831	-.039	-.195	.166	.646
31 私が行う解釈や直面化は、クライアントが自分の問題を明確にしたり理解する助けになっていないと思う。*	-.091	.668	-.137	.126	-.086	.428
21 私のクライアントについてのアセスメントは、正確でないと思う。*	.106	.622	.112	.037	-.059	.630
24 私は、クライアントの様々な問題を扱うための技法を持っていないと感じる。*	.035	.577	.201	-.017	.032	.580
34 私は、クライアントが変化しようとする気持ちや心の準備ができていのかどうかをアセスメントすることができると思う。	.089	.567	-.070	.106	.084	.552
15 私には、効果的なカウンセリングを行うための基本的な知識があると感じる。	.296	.525	-.038	.057	-.067	.594
第3因子〈動機づけの低いクライアントへの対応 3項目 $\alpha=.789$ $M=3.70$ $SD=0.87$〉						
27 私は、カウンセリングのセッションにおいて自分の考えを言葉に表さないクライアントに関わることを困難に感じる。*	.070	-.074	.894	-.124	.055	.570
26 私は、お互いに決めた目標に向けて取り組む意欲が低そうにみえるクライアントに関わることに居心地の悪さを感じる。*	.024	-.154	.724	-.013	.044	.437
28 私は、意欲が低く優柔不断に見えるクライアントに対してどのように対応していいかわからない。*	-.063	.245	.654	.115	-.093	.606
第4因子〈クライアントの状況・状態の考慮 5項目 $\alpha=.734$ $M=4.36$ $SD=0.60$〉						
37 私は、自分よりも経済的状況の異なる立場のクライアントに、効果的に関わることができないと思う。*	-.245	.244	.129	.611	.019	.536
29 社会的弱者の立場におかれている人のカウンセリングをする過程において、自分と相手との違いを乗り越えようと努力することができる。	.128	-.269	-.002	.601	.121	.388
3 セッションを終えようとするとき、素っ気ない態度をとったり突然終わらせたりはしないでいられると思う。	-.030	.072	-.115	.515	-.056	.308
30 私は社会的背景の異なるクライアントにも効果的なカウンセラーでいられると思う。	.120	.118	.128	.515	-.017	.591
4 クライアントがどう反応するかを考えながら応答することができると思う。	.253	.060	-.110	.501	-.023	.488
第5因子〈カウンセラーの価値判断の抑制 3項目 $\alpha=.703$ $M=4.12$ $SD=0.18$〉						
2 面接において、私はクライアントに自分自身の価値観を押し付けがちだと感じる。*	.095	-.080	.055	.067	.657	.435
35 私はアドバイスを一方的に与えるかもしれないと感じる。*	-.095	.044	.052	.089	.646	.430
7 私は、クライアントの価値観や信念などに対して評価を下していると思う。*	-.061	.092	-.029	-.078	.617	.311
因子間相関						
I		.647	.278	.550	.312	
II			.458	.596	.318	
III				.460	.524	
IV					.382	

*: 逆転項目

Table 2 日本版カウンセリング自己効力感尺度得点と一般性自己効力感得点の相関

	日本版カウンセリング自己効力感尺度各因子					合計得点
	1. カウンセリング面接技能への自信	2. クライエント理解と目標設定	3. 動機づけの低いクライアントへの対応	4. クライエントの状況・状態の考慮	5. カウンセラーの価値判断の抑制	
一般性自己効力感	.39***	.15***	.26***	.35***	.12 ⁺	.42***

***: $p < .001$ +: $p < .100$

結 果

因子分析 因子分析の結果を Table 1 に示した。

第 1 因子は解釈や直面化といったより熟練の必要な技法や、感情の反映、積極的傾聴、明確化のようなカウンセリング場面全般で用いられるカウンセリング面接技能への自信を尋ねる項目で構成され、〈カウンセリング面接技能への自信（6 項目）〉と命名した。第 2 因子は目標設定や見立て、クライアントについての理解に関する項目で構成され、〈クライアント理解と目標設定（7 項目）〉と命名した。第 3 因子は動機づけが低かったり言語的表現が乏しいクライアントへの対応に困難を感じる内容であり〈動機づけの低いクライアントへの対応（3 項目）〉と命名した。第 4 因子はクライアントが置かれている経済的・社会的状況とクライアントの反応や心理状態を考慮した対応に関する項目で構成され〈クライアントの状況・状態の考慮（5 項目）〉と命名した。第 5 因子はカウンセラーのクライアントに対する価値判断を抑えることに困難を感じる内容であり〈カウンセラーの価値判断の抑制（3 項目）〉と命名した。次に項目-全体得点相関および G-P 分析を行った結果、各項目との有意な相関や、上位群と下位群の得点間における有意差が全ての項目において認められた。

信頼性の検討 クロンバックの α 係数を算出したところ、第 1 因子が .881、第 2 因子が .875、第 3 因子が .789、第 4 因子が .734、第 5 因子が .703 であった。全項目の α 係数は .913 であり高い信頼性が確認された。

妥当性の検討 一般性自己効力感得点と日本版カウンセリング自己効力感尺度得点のピアソンの相関係数を算出し収束的妥当性を検討した。第 5 因子得点との間に有意傾向がみられ ($r = .12$, $p < .052$)、他

の各因子得点及び合計得点との間においては有意な正の相関がみられた ($r = .15 \sim .42$, $p < .001$) (Table 2)。

考 察

本研究は、カウンセリングを行う自己効力感を測定するための日本版カウンセリング自己効力感尺度を作成し信頼性と妥当性を検討することであった。

翻訳を行う過程で原文に忠実に翻訳すると、日本の文化や心理臨床実践に適応する際に文章内容に違和感が生じ、全ての項目において多少の改変を行った。そのため、バックトランスレーションを行うことは困難であり、Larson et al. (1992) の考えるカウンセリング自己効力感との概念的同一性を検討することはできなかった。しかし、このことは、カウンセリングにおける自己効力感の概念内容が日本と欧米では相違がある可能性を示し、今後、日本の心理臨床実践に適した自己効力感の概念の検討と、尺度を再考していくことの重要性が示唆された。

因子分析の結果、日本版カウンセリング自己効力感尺度は〈カウンセリング面接技能への自信〉〈クライアント理解と目標設定〉〈動機づけの低いクライアントへの対応〉〈クライアントの状況・状態の考慮〉〈カウンセラーの価値判断の抑制〉の 5 因子から構成されていることが明らかになった。尺度の信頼性について検討した結果、 α 係数が .881～.703 の範囲であり項目数の少ない第 3 因子と第 5 因子でも α 係数の数値は十分な値を示していた。よって十分な内的一貫性を有しているといえる。収束的妥当性は、一般性自己効力感尺度との相関から検証された。COSE と肯定的自尊心との相関があることが Larson et al. (1992) によって示されていたのと同様に、本研究においても、類似した概念である一般性自己効力感と相関があり、日本版カウンセリング

自己効力感尺度は妥当性を有していることが示された。

原板の COSE と日本版カウンセリング自己効力感尺度の因子構造を比較すると、種々の相違点が見出された。

まず類似しているのは、第 5 因子の〈カウンセラーの価値判断の抑制〉であった。COSE の「価値観の気づき」因子を構成した 4 項目の内の 3 項目で構成されており、ほぼ同様の結果となった。カウンセラーの持っている価値観や先入観を先ずは抑えて、クライアントの話を聴くといった、肯定的関心に関わる態度は日米で共通していることが分かる。

他の因子においては、原版と異なっていた。第 1 因子と第 2 因子は、COSE ではそれぞれ「マイクロスキル」因子と「プロセス」因子に命名されていたが、日本版カウンセリング自己効力感尺度では、〈カウンセリング面接技能への自信〉と〈クライアント理解と目標設定〉に命名され、異なる構成概念であることが示された。欧米ではマイクロスキルのような一つ一つの基礎的なスキルを習得した上で、クライアントとの関係性や経過を考慮したより複雑で統合的なスキルを習得するといった階層的な訓練方法が用いられている。そのため、基本的なスキルを反映した「マイクロスキル」因子と、より複雑なスキルを反映した「プロセス」因子にわかれていたと考えられる。一方、本邦では、臨床心理学の専門的実践活動に定められた四領域（心理面接、心理査定、臨床心理的地域援助、調査・研究・発表）にならって臨床心理学を学んでいる。臨床心理士養成のための大学院でもこの四領域に沿ったカリキュラムが作成されている（財団法人日本臨床心理士資格認定協会、2008）。そのような教育・訓練方法が因子構造に反映され、上記四領域のうちの前者二領域に概念的に近い形で、日本版カウンセリング自己効力感尺度の第 1 因子には、〈カウンセリング面接技能への自信〉、第 2 因子には〈クライアント理解と目標設定〉と因子が構成されたと推測する。

次に、日本版カウンセリング自己効力感尺度の〈動機づけの低いクライアントへの対応〉因子は、COSE の「困難なクライアントの行動への対応」因子に相当する因子構造であった。しかし「困難なクライアントの行動への対応」因子に含まれていた 1 つの項目が削除されたことにより、他の動機づけが

低かったり言語的表現が乏しいクライアントへの対応に困難を感じる内容の項目で構成されることとなった。削除された項目は、アルコールや自殺、虐待の問題をクライアントが有していた時の危機的状況への対応に関する内容（「I feel competent regarding my abilities to deal with crisis situations which may arise during the counseling sessions —e.g., suicide, alcoholism, abuse, etc.」）である。本邦でも臨床実践で扱う問題が多様化しており、カウンセラーがそれらの問題を持つクライアントと適切に関わるようになることは重要であると思われるが、項目が削除された理由として、臨床場面で生じる問題別の対応や知識について教育訓練を受ける場の少ないことや、本邦に比べて欧米の方が、関わるクライアントの問題が非常に多様であることが考えられる。また、アルコールや自殺、虐待等の問題は、主に扱われる領域も臨床上の対応の仕方も異なる問題であるのにも関わらず、COSE で 1 つの項目の中に含まれていたという項目作成上の問題もあるだろう。

最後に、第 4 因子は、概ね COSE の「文化的能力」因子に対応する内容であったが、「文化的背景が異なるクライアントと関わるスキル」を尋ねる項目が削除された。COSE で「文化的能力」因子が構成された理由として、欧米における多民族や多文化への意識の強さが挙げられる。加えて、サイコロジストを養成する初期段階から文化的能力を養うためのプログラムが導入され、多文化・異文化間カウンセリングの重要性が認識されている（Sue, 2003）為だと考えられる。本邦でも、多文化社会への変動が進んでいるものの、文化的能力を習得したカウンセラーの養成方法は今後の課題であり（井上, 2004）、発展途上の分野である。よって、本尺度では「文化的能力」に関する項目が因子に含まれず、クライアントが置かれている経済的・社会的状況とクライアントの心理状態を考慮した対応に関わる内容の項目がまとめられ〈クライアントの状況・状態の考慮〉因子を構成したと考えられる。

以上の様に、第 5 因子の〈カウンセラーの価値判断の抑制〉に表されていた通り、肯定的関心に関わるカウンセラーの態度は日米で共通しているが、他の因子では、教育・訓練内容や文化的・社会的背景によって日米におけるカウンセラーの自己効力感の

構成概念は異なることが示された。

今後は、本尺度を用いることで訓練生やカウンセラーのスキルや態度を効果的に実践する能力についての信念を測定することができ、職業的発達の一指標として捉えることが可能になるだろう。ただし、スキルの上達を伴わない自己効力感の向上や、自己効力感の過大評価や過小評価は、臨床実践に否定的な影響を及ぼすだろう (O'Brien et al., 1997)。故に、実際の心理臨床実践のパフォーマンスや経験年数、及びスーパーヴィジョンとの関連について検討したり、万能感と自己効力感の区別も行う必要がある。どのような教育を受けたり経験を有した臨床家が、「適切な」自己効力感を有するののかについても吟味することで、カウンセラーの教育や訓練、職業的発達への示唆を得られると期待できる。

今後の課題

本研究は、本邦の心理臨床の代表的な学会の会員を対象に無作為抽出を行ったが、学会員でない人が含まれておらず、より幅広いカウンセラーを対象とすることが望ましい。

翻訳過程において、原文に忠実に翻訳すると違和感があった。日本の心理臨床に適する項目にしたことからバックトランスレイションを行うことは困難で、Larson et al. (1992) の考えるカウンセリング自己効力感との概念的同一性は検討することができなかった。また、「1つの項目で2つ以上のことをきいていない (鎌原ら, 2007)」ことに注意しなければならないが、原著でも多くの項目が2つ以上のことを尋ねており、本尺度においても2つ以上の内容を尋ねる項目が複数あった。項目の文章自体も比較的長く、容易に理解しにくかったと思われる。

加えて、質問紙の感想欄に記述された内容から、本尺度の限界点や今後の改良点が見出された。回答することに難しさや迷いを感じたり、表現に違和感を感じたと記述されていた感想が19件寄せられた。その内、5件は文章自体の難しさを述べるものである。また、個別カウンセリング業務を行っていない場合やカウンセリングの能力以外に重要な能力があると認識している場合、回答し辛さや違和感があるとの感想が7件見受けられた。カウンセリングは全ての心理臨床業務の基本でもあり、日本版カウンセリング自己効力感尺度はその基本となるスキル

を実践する自己効力感を測定している。しかし、下山・丹野 (2001) も述べるように、「個人療法だけでなく家族療法などの社会システムに介入する技法、コンサルテーションやネットワーキングなどのコミュニティ援助の技法、近年発展がめざましいアセスメント技能など」実践活動の技能は多岐にわたる。今後は、より広範な心理臨床業務を含む尺度の開発が期待される。日本版カウンセリング自己効力感尺度が特定の理論を背景にしていると理解されている感想も見受けられた。COSE は特定の療法に偏らず、マイクロカウンセリングなど訓練過程で用いるテキストから項目を集めたものである。例えば、「解釈」「直面化」は、マイクロスキルにも含まれている。しかし本邦では、精神分析理論の用語として理解されている傾向が強く、特定の理論に偏った印象を与えたものと思われたと考えられる。今後は、これらの点に留意し、より回答に負担が少なく日本の心理臨床を的確に反映した理解し易い尺度に改善していくことが求められる。

引用文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Bandura, A. 1982 Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, **37**, 122-147.
- Barnes, K. L. 2004 Applying self-Efficacy theory to counselor training and supervision: A comparison of two approaches. *Counselor Education and Supervision*, **44**, 56-69.
- Beutler, L. E., Machado, P. P., & Neufeldt, S. A. 1994 Therapist variables. In Bergin, A. E., & Garfield, S. L. (Eds) *Handbook of psychotherapy and behavior change*. 4th ed. Oxford, England: John Wiley & Sons, pp. 229-269.
- Barnett, J. E., Baker, E. K., Elman, N. S., & Schoener, G. R. 2007 In pursuit of wellness: The self-care imperative. *Professional Psychology: Research and Practice*, **38**, 603-612.
- Cashwell, T. H., & Dooley, K. 2001 The impact of supervision on counselor self-efficacy. *Clinical Supervisor*, **20**, 39-47.
- Daniels, J. A., & Larson, L. M. 2001 The impact of performance feedback on counseling self-efficacy and counselor anxiety. *Counselor Education and Supervision*, **41**, 120-130.
- Guy, J. D., Poelstra, P. L., & Stark, M. J. 1989 Per-

- sonal distress and therapeutic effectiveness: National survey of psychologists practicing psychotherapy. *Professional Psychology: Research and Practice*, **20**, 48-50.
- 井上孝代 2004 これからの社会に求められる異文化カウンセリング—「マクロ・カウンセリング」の視点から 異文化教育, **20**, 40-55.
- Johnson, E., Baker, S. B., Kopala, M., Kiselica, M. S., & Thompson, E. C. III. 1989 Counseling self-efficacy and counseling competence in prepracticum training. *Counselor Education and Supervision*, **28**, 205-218.
- 鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・仲澤 潤 2007 心理学マニュアル質問紙法 北大路書房
- 金沢吉展 2006 臨床心理学の倫理を学ぶ 東京大学出版会
- 金沢吉展・岩壁 茂 2006a 心理臨床家の専門家としての発達, および, 職業的ストレスへの対処について: 文献研究 明治学院大学心理学部付属研究所紀要, **4**, 57-73.
- 金沢吉展・岩壁 茂 2006b 心理臨床家の職業的発達に関する調査から—(1) 臨床家としての自己評価に影響を与える要因について 日本心理臨床学会第25回大会発表論文集, 234.
- 葛西真記子 2005 「カウンセリング自己効力感尺度 (Counselor Activity Self-Efficacy Scales)」日本語版作成の試み 鳴門教育大学研究紀要教育科学編, **20**, 61-69.
- Lambert, M. J., & Bergin, A. E. 1994 The effectiveness of psychotherapy. In Bergin, A. E., & Garfield, S. L. (Eds): *Handbook of psychotherapy and behavior change*. 4th ed. Oxford, England: John Wiley & Sons, pp. 143-189.
- Lambert, M. J., & Cattani-Thompson, K. 1996 Current findings regarding the effectiveness of counseling: Implications for practice. *Journal of Counseling & Development*, **74**, 601-608.
- Lambert, M. J., & Barley, D. E. 2001 Research summary on the therapeutic relationship and psychotherapy outcome. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, **38**, 357-361.
- Larson, L. M., & Daniels, J. A. 1998 Review of the counseling self-efficacy literature. *Counseling Psychologist*, **26**, 179-218.
- Larson, L. M., Suzuki, L. A., Gillespie, K. N., Potenza, M. T., Bechtel, M. A., & Toulouse, A. L. 1992 Development and validation of the Counseling Self-Estimate Inventory. *Journal of Counseling Psychology*, **39**, 105-120.
- Leach, M. M., Stoltenberg, C. D., McNeill, B. W., & Eichenfield, G. A. 1997 Self-efficacy and counselor development: Testing the integrated developmental model. *Counselor Education and Supervision*, **37**, 115-124.
- Lent, R. W., Hill, C., & Hoffman, M. A. 2003 Development and validation of the Counselor Activity Self-Efficacy Scales. *Journal of Counseling Psychology*, **50**, 97-108.
- Lent, R. W., Hoffman, M. A., Hill, C. E., Treistman, D. Mount, M., & Singley, D. 2006 Client-specific counselor self-efficacy in novice counselors: Relation to perceptions of session quality. *Journal of Counseling Psychology*, **53**, 453-463.
- Nelson, M. L., & Neufeldt, A. 1996 Building on an empirical foundation: Strategies to enhance good practice. *Journal of Counseling & Development*, **74**, 609-615.
- O'Brien, K., Heppner, M. J., Flores, L. Y., & Bikos, L. H. 1997 The Career Counseling Self-Efficacy Scale: Instrument development and training applications. *Journal of Counseling Psychology*, **44**, 20-31.
- 坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフエフィカシー尺度の試み. 行動療法研究, **12**, 73-82.
- 下山晴彦・丹野義彦 2001 講座 臨床心理学〈1〉臨床心理学とは何か 東京大学出版会
- Sipps, G. J., Sugden, G. J., & Faiver, C. M. 1988 Counselor training level and verbal response type: Their relationship to efficacy and outcome expectations. *Journal of Counseling Psychology*, **35**, 397-401.
- Stoltenberg, C. D., & Delworth, U. 1987 *Supervising counselors and therapists: A developmental approach*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Sue, D. W., & Sue, D. 2003 *Counseling the culturally diverse: Theory and practice (4th ed.)*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Sutton, J. M., & Fall, M. 1995 The relationship of school climate factors to counselor self-efficacy. *Journal of Counseling & Development*, **73**, 331-336.
- 財団法人日本臨床心理士資格認定協会 (監修) 2008 新・臨床心理士になるために [平成20年版] 誠信書房

(受稿: 2010.5.19; 受理: 2010.11.11)